

東京大学経済学図書館所蔵 ウィリアム・ホガース版画 連続展示
ホガースと18世紀イングランドの暮らし 第1回「話を聴く」 展示品解説

A midnight modern conversation (当代深夜の酒宴), 1732/33. 【展示番号 3】



ロンドンの裁判所近くにある、シャイア通り沿いのセイント・ジョーンズ・コーヒーハウスのテンプル・バーが舞台と言われる一作品。ここに11名の男たちが集い、酒宴を催している。時はすでに朝の4時、蝟燭の火も燃え尽き、床には空の酒瓶と壊れたパイプが散乱し、画面右下のおまるはすでに溢れてしまっている。男たちは、自分たちの鬘がずれている（あるいは落ちている）ことに気づかないくらいに酩酊している。

数名の男たちの名前は、研究者によって特定されている。画面の右側でパイプに火をつけようとして袖口を焦がしている人物は、彼のポケットに『ロンドン・ジャーナル』と『ザ・クラフツマン』の2紙が入っていることから政治家で、おそらくホガースの友人のエベニーザー・フォレストとされる。画面左側の白いターバン（ナイトキャップ）の男は、以前ホガースの仕事を受けた製本屋のチャンドラー。手前で、椅子から転げ落ちている人物は、プロボクサーのジェームズ・フィグ。その頭にワインを注いでいるのは、ホガースの友人であるランビー医師。一方の手でパイプを持ち、もう片方でパンチボウルから酒を汲んでいる人物は、コルネリウス・フォード牧師。牧師の頭に自分の鬘を乗せ、もう一方の手でグラスは掲げているのは、タバコ屋のジョン・ハリソン。ホガースは彼のタバコ紙の紋章のデザインをしていた。なお、ハリソンの掲げるグラスの下にいる大きな鬘の人物の名は明らかではないが、彼はケトルビー (Kettleby) と呼ばれる、バーで騒がしく演説する酔っ払いである。

この作品においてホガースは、当時の酒宴の様子を単に再現するだけではなく、個々の人物の個性を写實的に描写することを試みたのである。

Scholars at a lecture (講義を聴く学生) , 1736. 【展示番号 2】

講義をするのは、オックスフォード大学の教授・ウィリアム・フィッシャーとされている。彼は教壇に立って、“Datur Vacuum”（余暇が与えられん）と題した講義ノートを読み上げている。その周りで学生たちは、無関心・懐疑的な態度を示したり、居眠りやあくびをしたりして、真面目に聴講していない。

この講義ノートに記された“Vacuum”には「余暇」の意味がある一方で、「真空」の意味もあり、大学の講義の退屈さと中身のなさ（真空）を風刺していることが読み取れる。

さらにホガースは、こうした大学のマンネリズムで退屈な講義に対する学生たちの露骨な反応についても、カリカチュア化しようとしたのである。

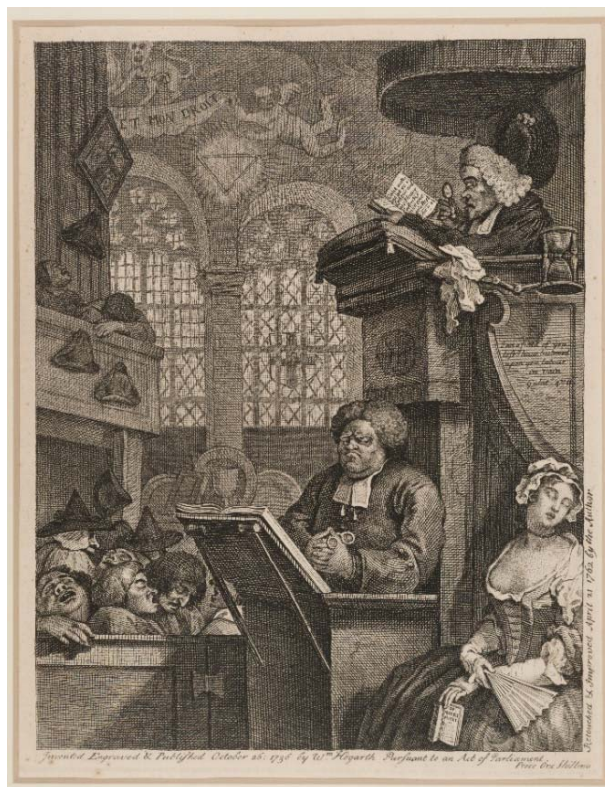


The sleeping congregation (居眠り会衆) , 1736. 【展示番号 4】

高い説教壇から牧師が、「マタイによる福音書」の第 11 章 28 節「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」をだらだらと読み上げている。それを受けてか、会衆の多くが「休んでいる」。右手前の娘は、「結婚について」の章を開けたまま居眠りをしている。その横の牧師は、娘の胸元をのぞいている。

このように退屈な説教、居眠りをする会衆、不謹慎な牧師や、説教壇の側壁に刻まれた「あなたがたのために苦労したのは、無駄になったのではなかったかと、あなたがたのことが心配です。」

（「ガラテヤの信徒への手紙」第 4 章 11 節）の聖書の言葉、また左上部の「神と私の権限」のモットーから意図的に「神」の文字が隠されていることなどから、当時のイギリスにおける信仰への不熱心さをホガースが皮肉っていることが分かる。



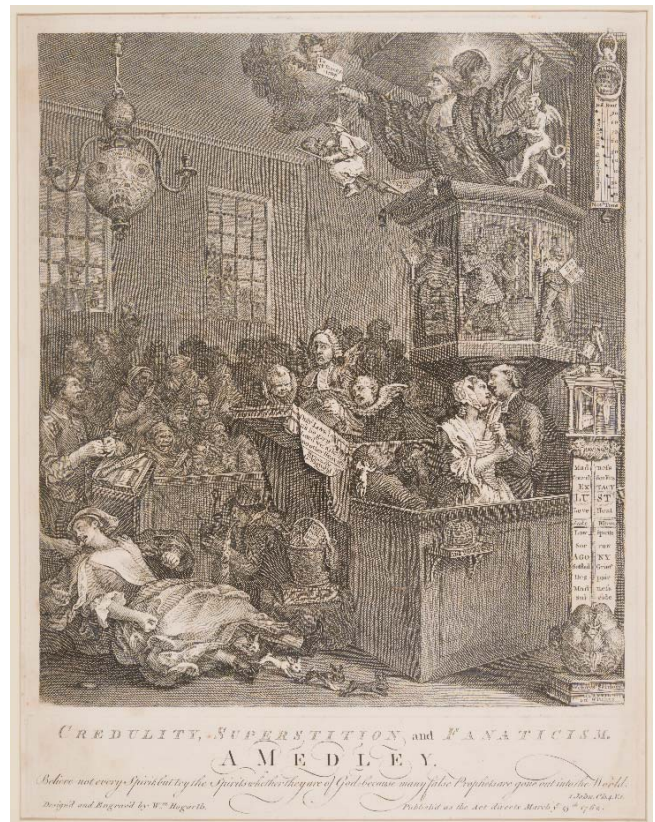
Credulity, superstition and fanaticism: a medley (盲信・迷信・狂信：信者の集まり), 1762.

【展示番号 1】

「宗教的熱狂を図解すれば」(*Enthusiasm delineated*, 1761年頃の作品)の改訂版。メソジスト派を辛辣に風刺した作品。

説教台で熱弁するのは、メソジスト派の指導者ジョージ・ホイットフィールドとされる。ガウンの下に道化服を着ており、熱弁のあまり鬢が取れて、イエズス会士の剃髪が見えている。これは、当時の人々がメソジスト派とカトリックとを同一視する偏見があったことに由来する。信者の表情からも、狂信的な様子がうかがえる。窓の外では、イスラム教徒が集会の様子をのぞき込んでいる。女性のスカートの中からウサギが飛び出す様子は、医者を欺いてウサギを産んだと信じこませたメアリー・トフトの事件を揶揄したものだ。

画題の下には、「どの霊も信じるのではなく、神から出た霊かどうかを確かめなさい。偽預言者が大勢世に出て来ているからです。」(「ヨハネの手紙一」第4章1節)とあり、こうした宗教的熱狂を危険視するホガースの姿勢がうかがえる。



【参考文献】

- ・大河内暁男解説『Hogarth 版画展図録：第4回経営シンポジウム』大東文化大学経営研究所、2005年。
- ・小林章夫、齊藤貴子『諷刺画で読む十八世紀イギリス：ホガースとその時代』朝日新聞出版、2011年。
- ・東京大学経済学部資料室編『Adam Smith in action：アダム・スミスの思想形成過程とその東アジアへの波及：特別展示』東京大学経済学図書館、2018年。
- ・森洋子『ホガースの銅版画：英国の世相と諷刺』岩崎美術社、1981年。
- ・A Danish Large Oval Pewter Platter with a design based on an English Hogarth Engraving of the 1730s. (http://www.pewterbank.com/A_Large_Platter_decorated_in_the_style_of_Hogarth...2.pdf)

東京大学経済学図書館所蔵のウィリアム・ホガース版画コレクションは、元総長・名誉教授・大河内一男(1905-1984)と名誉教授・大河内暁男(1932-2017)の両先生が、親子二代にわたって収集した版画71点からなります。これらは大河内暁男先生の死後に、ご本人のご遺志にもとづき、ご遺族から本館に寄贈されました。

本コレクションは、18世紀イギリスを代表する画家の一人であるウィリアム・ホガース(William Hogarth, 1697-1764)の作品のうち、イギリスの同時代の社会・日常生活に焦点を当ててそこから道徳的・教訓的主題を見出した社会風刺版画を中心に収集したものです。一般的な美術鑑賞を超えて、社会政策、イギリス経営史といった両先生の学問の一端をこれらの版画の中から見い出していただければ幸いです。

※展示会場は図書館閲覧室内ですので、一般の図書館利用者のために静粛な環境の維持にご協力くださいますようお願いいたします。

ご寄付のお願い

東京大学経済学図書館は本年（2019）4月に創設100周年を迎えます。この1世紀余りの間、日本における経済学の専門図書館として継続的な資料収集に努めてきました。所蔵資料は学内外を問わず、調査・研究のための利用に広く供し、資料保存や資料のデジタル化にも力を入れ、大学図書館、専門図書館として社会的責任を果たしてきました。

本館は、今後も幅広い資料を収集し、未来へと伝えてゆくために努力をするため、経済学部資料室において以下のような活動を行い、貴重な資料を後世に伝えるための方法論・技術論の調査・研究、さらには人材育成や社会教育普及活動に取り組んでいます。

- （1）企業資料の収集・保存・公開・活用に関する国際共同研究
- （2）企業資料アーカイブネットワークの構築
- （3）近現代劣化資料の保存と公開に関する研究の推進
- （4）書誌学・古文書学の実践的研究基盤の形成
- （5）日本初の経済学部として蓄積された研究情報の公開
- （6）資料保存に関わる機器・機材・素材に関する共同研究

本展示会もこういった活動の一端ではありますが、国立大学を取り巻く財政的状況は厳しく、これらの活動を継続的に実施し、より充実したものとするには、皆様のご支援にも頼らざるを得ません。どうか趣旨をご理解の上、より一層のご支援をお願いいたします。

東京大学経済学図書館長 小野塚知二

※寄附は郵送による申込のほか、Webからでも簡単な手続きで行うことができます。詳しくは右のQRコードを読み取って専用サイトにアクセスしてください。



発行日：2019年1月15日

解説執筆：森脇優紀

（東京大学経済学部資料室・特任助教）

編集：東京大学経済学部資料室

発行：東京大学経済学図書館